

# 蕪村の宇治行

ぶそんのうじこう

田原の隠れ里

## 蕪村の宇治行～田原の隠れ里

このコースは江戸時代の代表的な画家・俳人のひとりである与謝蕪村が来訪した足跡と、万葉歌人の施基皇子の伝承にまつわる旧跡を結ぶコースとして設定したものです。

蕪村の句碑が建つ妙楽寺のある郷之口の古い家並み、伝承に彩られた高台の高尾からの絶景、歴史を感じさせる荒木地区を巡り、大峰山への手軽なハイキングコースとしてもお奨めです。

コース設定にあたり郷之口から登ることとしていますが、逆に荒木方面からたどることも可能です。

コースの始点には案内板、道中には道標を設置し、町のHPにコースガイドを掲載しています。

なお、コース上には利用可能な公衆トイレはありませんので注意願います。

全行程：約11km（下町～ね田）  
所要時間：約5時間（見学・休憩含む）  
高低差：約380m  
消費カロリー：約756kcal(体重60kgの人が平地を歩く計算)  
交通アクセス：

JR奈良線「宇治」、京阪「宇治」、近鉄「新田辺」から  
京阪宇治バス「維中前」「工業団地」「緑苑坂」行に乗車  
最寄りバス停「下町」（郷之口側）「ね田」（荒木側）

## 田原の隠れ里 こうの高尾

高尾地区は郷之口から北の大峰山系に登った丘陵中腹にある集落で、周囲からは見えにくい位置にあるため、宇治田原の「隠れ里」というにふさわしい趣があります。古くから施基皇子（王院の馬場）、弘法大師（井戸）、近江源氏（六角承禎）、お亀の方（徳川家康側室）などに関する伝承が残され、「お弓」や「縁たたき」など独特の風習が伝えられています。

与謝蕪村がその絶景を「宇治行」に記しているように、集落周辺からは、遠く京都市内や生駒山方面を展望することが可能です。

広い範囲に植えられた多数の梅の木は、3月中旬くらいに見頃を迎えます。

## 古代文化の華 荒木

荒木地区は大峰山系南側の丘陵の裾部に開けた集落で天皇谷から流れ出る川が形成した台地の上にあります。約1万年前の縄文時代早期の土器が出土しており古くから生活が営まれていたことが伺えます。

山城から大津へ至る古代の官道「田原道」が通り、奈良の都（平城京）との結びつきが強かったものと思われま。そのため、7世紀後半の白鳳時代には山瀧寺が建立され、飛鳥の寺院や平城宮と同じタイプの瓦が出土しています。明治に大御堂が町内最初の学校となってから寺院としての歴史を終えましたが、鎌倉時代の仏像は今も観音堂に安置されています。

そうした背景が「田原天皇」の伝承を生んだ素地になっているものと思われま。



妙楽寺

## 蕪村の宇治行

与謝蕪村は、天明3(1783)年9月13日、弟子の毛条（奥田治兵衛重義）の招きで来訪して松茸狩りを楽しみ、帰京後そのときの様子を「宇治行」にまとめ、刷り物にして配布しました。しかしその年の12月25日、68歳の生涯を閉じました。

蕪村は礼状とともに直筆の「宇治行」を送っておりその真蹟をもとに大正15年、妙楽寺境内に句碑が建立されました。なお、句碑に刻まれた句は、世に知られている「宇治行」に収録されているものとは異文となっています。（妙楽寺：0774-88-4118）



## 弘法大師の井戸

あるとき高尾に一人の僧が訪れ、老婆に水を所望しました。しばらくして戻った老婆に僧が尋ねると、高台にある村から下の川までくみに行ったと聞いて感激し、指し示した場所を掘るよう言い残して立ち去りました。老婆からその話を聞いた村人が掘ってみると、清水がこんこんとわき出ました。旅の僧が弘法大師であったと知ると、以来、井戸は「弘法大師の井戸」と呼ばれるようになりました。

水道が整備された現在も、井戸は地域の人たちの手で大切に守られています。



田原天皇社跡

## しき 施基皇子 (田原天皇)

天智天皇の第七皇子である施基皇子は、都を離れて高尾で暮らし、馬を駆った馬場跡（王院の馬場）が残っていたと伝えられます。その後荒木に移ってそこで亡くなり、背後の山上に「田原天皇社」がまつられました。その後社は天皇谷前に移り、明治に大宮神社へ合祀されました。

皇子は即位していませんが、その子湯原王により「田原天皇」とおくりなされたといわれます。

皇子が詠んだとされる歌は、万葉集に収録されています。



妙楽寺蕪村句碑